In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	変革期における思想の形成(一)：阪谷素の場合
Author	大月，明
Citation	人文研究. 12 巻 8 号, p.807-819.
Issue Date	1961
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学会
Description	天野元之助博士還暦記念号

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

変革期における思想の形成（一）

――阪谷素（しろし）の場合――

大月明

一

日本における啓蒙思想は、すくなくとも明治時代最初の十年間、厳密にいえば明治八年末の「明六社」の解散までの時期――啓蒙期――に展開し、地主＝ブルショアシーを階級的な基盤とする天皇制絶対主義政権によってとられた、啓蒙専制主義的開化政策のなかで花をひらき、またそれをイデオロギー的に代弁したのも多くは絶対主義官僚であったが、それは全国民的な基礎のうえで展開され、わが国近代化の先頭をきるものとしてまさしく啓蒙思想の役割をはたし、やがてブルショア民主主義にその遺産をひきつぐことになったのであるといわれる。[1] こうした見解は、明治維新を絶対主義的変革として、したがって明治政権を絶対主義政権として把握する服部之総・遠山茂樹氏らのいわゆる講座派の立場からの、とくに「明六社」についての評価を継承して発展させたものであるが、服部氏の「絶対主義的啓蒙思潮」、遠山氏の「啓蒙専制主義」という「明六社」思想家群の啓蒙活動にたいする規定ないし評価をほぼ今日の定説とし、ただ「絶対主義」という規定の框内でぎりぎり一杯の開明性・啓蒙性を、明治十年までのいわば形成初期の明治政権に認め、それを理論的に代弁したものとして「明六社」思想家集団を把握しようとしたものであった。[2]

明治十年までの絶対主義政権に開明性・啓蒙性を認めるという見解は、わが国の近代化過程における経済と政治、あるいは広く文化とのずれをいかに考えるかについても興味ある方法であろう。しかしこれらの諸見解に対しては、近頃明治

維新史研究を中心とする日本近代史研究に対する反省ないし再検討を求める声の多いなかで、とくに講座派的見解への疑問・再検討を強調する立場から疑問が提出されている。[3] 提出した人々の立場もいろいろであり、その分野も思想史にとどまらないが、「明六社」評価も含めた近代史研究の反省において特徴的だと思われることは、たんに講座派か労農派かといった二者択一的競合を生命とするものではなく、それぞれの理解のもつ方法論的実証的問題点を検討しあうことを内容とし、出発点とするものでもあるということであろう。といって好き勝手な百家斉放であってもならない緊急さと、問題意識の整合をこの反省期は研究者に要求するのではあるが、すくなくとも今までの理解に対して多くの角度からの新しい分析が要求されるであろうし、そのさい、従来の研究方法のなかで無意識に前提とされている固定観念をとり除くこと、無意識のうちに前提している問題関心を意識化すること、そしてこれらを出来る限り共通の場において交流をはかることが必要であるという意見[4]も肯定されねばならないであろう。ほとんど「明六社」の思想家によるといってよい日本における啓蒙思想の展開と性格についても、これまでになされた性格づけや評価が定説となっているという評価まで含めての再評価が必要となろう。たとえば上山春平氏による従来の「明六社」評価への疑問に対する決定的な反論はまだみられないように思われるし、啓蒙思想家達の性格が説かれる場合にも、まだ幕末・維新という時期的落差をもった理解の仕方が叙述の問題ではなく存するようにも思われる。明治期の行動にその歴史的意義を認める啓蒙思想家も、いうまでもなく全て[5]が幕末期以降の思想的行動の連続であって、明治維新という変革期に直面して示した幕末知識人の思想的対応の仕方と、そこに生れた社会的あるいは政治的行動の変化の意味がもっとも重要になってくるのだと思う。幕末知識人といっても、やがて明治官僚へと進む職業的洋学者、洋学による新知識を吸収する幕府政治家、新知識を洋学に求める諸藩士・幕臣、経世家をもって任じる儒学者あるいは草莽の国学者等々、その構成分子は雑多であり、ただ儒学的教養を思想的基盤とし、武士階級及びそれにつらなる人々を中核としてその他の人々は階級的にも地理的にもその周囲に点在するという紐帯をもつにすぎないものである。そうした知識人達が幕末期にえた思想形成と内容から、幕府崩壊をどうみ、新政府成立をどう

迎えどう対処していったかはたんに世相史的現象にとどまらず、日本人の思想の近代化、あるいは日本近代思想の構造と性格の究明にとって大きな意味をもつといえよう。このことは従来から行れた方法でもあろうが、思想史的にはさらに嘉永以降明治廿年代までの見通しのうえに立った分析を、時代区分の便宜さを認めたうえで、幕末・維新という時期的落差なしに行ってみる必要さは繰返し指摘したいと思う。[6]

私は以下、「明六社」の会員として、また同時に保守家の集団である「洋々社」の会員として変革期を過した阪谷素をとりあげ、幕藩体制下にその思想形成をほぼ終った一儒学者・教育者が、彼なりに新しい社会への接近を試みていった内容を考察し、その思想内容と性格を、とくに幕末期における思想内容と関連させて考えてみたいと思う。

二

三島毅の撰した「朗廬阪谷先生碑」[7]文（以下碑文という）によると、備中国川上郡九名村[8]において、父良哉の第三子として文政五年十一月十七日に生れた阪谷は、諱を素、号を朗廬、字を子絢といい、素三郎、のちには希八郎と称した。文政年間父が幕府代官属吏として大阪に住むようになると、奥野小山・大塩中斉[9]の門に入れられ儒学の初歩を学んだが、小山からは「遅鈍不能成業」といわれ、わずかに中斉は「異日必成大名」[10]と述べたという。父が江戸に移ると、同郷の一族であり父の親しい呂谷精渓[11]に学んだ。天保八年父が歿したため一時帰国したが、翌年（十六才）再び江戸に来り古賀侗庵[12]に学ぶようになった。侗庵門にあった阪谷は碑文によると文章によって名をあげたようで、都講（塾頭）に抜擢されており、北陸（天保12）、房相（天保15）、あるいは上毛（弘化3）と奥羽とを歩いた折にも、それぞれ「北遊放情」、「偷閑小記」、「東遊雅録」を書いている。これらの旅行は彼にとってその見聞を広め、文藻を養うことに役立っただけでなく、恐らく天保・弘化期の在地の事情を現地にみることにより、のちの備中国における体験と合せて彼の思想形成になんらかの要素となったであろう。とくに四十才の時、文久三年九月十三日に出発、山陽道・長州藩を経て熊本・佐賀・長崎・福岡を歩いて帰途は舟運によった鎮西旅行

は、その紀行文「鎮西発気稿」をみても直接文久手間西南諸藩の一遇を旅する緊迫性や時事論は文面にみえないし、その見聞は必ずしも時流をぬく卓見をともなったとはいえぬにしても、彼にとっては貴重な体験であったろう。この鎮西旅行よりさき一時帰郷[13]しさらに江戸に向おうとして大阪までくると、母の病気が知らされて帰郷、それからは津和野・津山・広島・岡山諸藩の招聘を断り、嘉永年間には備中国後月（しつき）郡梁瀬村桜谷に塾を設け、毎月郷里の母を見舞いながら学問を教えた。梁瀬村その他この後月郡には一橋家領が多く、同郡西江原村[14]には一橋家領役所があったが、一橋家から派遣されていた角田米三郎は領内郷村の子弟に就学の場所がなく、風俗も頽廃するのを憂えていた折阪谷と会い、彼に子弟の教育を委ねようと考えて西江原村寺戸に学校を建てることとした。創立の仕事は嘉永六年（廿一才）三月に始まり十月に終ったが、この学校の建設と経営には役所から郡中への貸付金制を立て、また掛金講を組立ててその利子と講金とから費用を出していた。これが興譲館[15]であり、「諸生伝習。幼稚皆能執業。遠之聞之。来学者踵相接。而館又傍官道。諸藩士大夫過者。必詣請益。先生（阪谷）亦善遇客。各満意而去。是以海内莫不知興譲館者。而先生之名大顕。」というが、角田等の保護奨励と阪谷の教授は、山陽道に近接する地の利と合せて興譲館の名を高めたことは事実で、西は肥前、東は松前に至る各藩の子弟が入学し、元治・慶応の頃は入学者が多く、校舎収容能力の限度まできていたという。阪谷は明治元年（四十六才）十月まで十六年間興譲館に儒学を講じたが、その間に鎮西旅行を行い、慶応二年には将軍家茂を助けて政務にあたり上洛していた徳川（一橋）慶喜にそのを慰められ、五人扶持を賜ろうとしたが請けず、それを館費にあて、かつ慶喜が阪谷を京都に留めようとしたのを断り帰国している。やがて明治元年秋興譲館を去り広島浅野家に仕え、明治三年（四十八才）には藩主に従って東京に出たが、同年七月廃藩置県令が出されると禄を辞して東京に留まり、そのごは警視庁・陸軍省・正院・文部省・司法省[16]につとめ、あるいは東京学士会院が創設されるとその会員に選ばれた。[17]晩年は官を辞し再び学校を建て教育にあたろうとして、東京の春日町に春崖学舎を建てたが、ほどなく明治十四年一月十五日五十九才で亡くなった。碑文には著作[18]として、『左説私鈔』『田舎話』（以上家蔵）、『評註東萊博議六巻』『日本地理書三巻』（以上刊行）があるという。

碑文その他によって阪谷の経歴を概観してみた。文政期に生れた阪谷が、大阪・江戸そして岡山更に東京と学問を続け教育にあたり時事論を論じたその時期は、天保期以降明治政府の成立に至る変転のめまぐるしい変革期であった。この変革期に儒学を学び教えた阪谷にたいする時代の圧力はそれ以前の時代とくらべても明らかに重くかつ大きいものであったといえよう。大塩や奥野に学んだのは幼時でありその影響はまず考えられないが、江戸にあって天保・弘化期といういわば彼の青年期に、昌谷精渓や、晩年の古賀侗庵に学び各地を歩いた阪谷には、ようやく内外に多事をきわめてきた社会情勢はその学問の性格・思想形成にとって一つの契機となっていったであろうし、嘉永以降の質量ともによりはげしい社会情勢の変化は、その情勢を肯定するにせよ否定するにせよ彼にたいして重要な圧迫となったであろう。しかしながら、阪谷の経歴を以上のように碑文を中心にみた限りでは、時事策・尊王攘夷論に先見の明を見出すべきものをもっていたということを物語るものもあるか、その思想形成の中核体である学問観・処世観の変転について述べるところは、碑文という性格もあろうが、少ない。たた終生朱子の『白鹿洞書院掲示』を信奉し、日常生活と教育にそれを誦説・服膺したことからも、また青年期に昌谷精渓や侗庵に教育をうけたことからも、その学問と思想が朱子学を中核とするものであったことは推測出来るのであり、川田剛もかって『朗廬文鈔』の序文に、「其学主洛閩。毎朝授業。先誦白鹿洞掲示。而不屑屑乎争辨理気王霸無極大極等。老釈陸王亦取其長。平生用意経世。」[19]と述べている。そのうえにたって碑文でも述べ、またその学問とそれに導かれた多くの遺作が示すように、詩文による文学面での声価が認められたのである。しかしながら変革期を体験した思想家の思想展開を知ろうとする者にとって重要だと思われるのは、上述したところにおいて想像したように、また川田も簡単に指摘し碑文も時事策・尊王攘夷論の二件を紹介しているように、阪谷の示した学問・思想面の活躍の一つ、時事論＝経世家的発言の多いことである。

三

阪谷の経歴を知るのにまず碑文によったように、われわれが阪谷の残した思想の展開のあとを変革期のなかであとずけようとするとき、碑文と『朗廬文鈔』序を含むその遺作『朗廬全集』（明治廿六年刊、以下全集という）をあげねばなるまい。全集はその内容を、書・論・序・引・辨言・記・説・讀・書後・題・跋・贊・銘・戒・紀傳・碑碣墓表・文・雑著・詩にわけて、それぞれに遺作を分類して収めてある。ところが阪谷が「明六社」に入ってから「明六雑誌」に発表した諸論文、また明治八年三月に創立された「洋々社」の代表的人物として「洋々社談」（「明六雑誌」と同形式）に発表した諸論文等は入っていないのであり、碑文もそれらにおいての活動を全く伝えていない。わずかに川田が「明六社」参加について述べているにすぎず、一儒学者としての遺作にとどまらないものを求める者としては、全集に補遺すべきものの多いことに注意すべきであろう。[20]

阪谷は廃藩置県後東京での生活をつづけたのであるが、明治七年二月以降になってからであろう（「明六雑誌」第一回の執筆が七年六月刊の第十号であることから推測すると二月以降まもないことだろう）、「明六社」に正式に入会、その定員（会員）として論文を「明六雑誌」に発表、講演会に参加し当時最高の学会の一員として、開化期文化の吸収と啓蒙につとめている。[21]「明六社」は明治六年、森有礼により学会結成がよびかけられ、当時もっとも多く外来文化に親しむ機会をもつ職業的洋学者と洋学研究者、あるいは洋学に興味をもつ知識人達によって結成されたが、「明六雑誌」はその機関紙として明治七年二月から発行されたもので、同月には会則も出来て森が会長となった。その催す講演会や「明六雑誌」が明治初頭一般の知識人、あるいは青年達に多大の影響を与えたことは、その発行部数の数量、あるいは『植木枝盛日記』にみえる枝盛に与えた刺激の強さからもわかろう。この「明六社」と「明六雑誌」の活動のなかで内容的に高い比重を占めるのは、やはり福沢諭吉・加藤弘之・西周・津田真道・森有礼等であろう。とくに新知識を求める諸方面の知識人層の要求に合致した、それらの人々の雑誌論文・演説による政治思想・道徳思想・政治法制の紹介と討論を中心とした外来文化に関する知識が、明治六・七・八年の知識人・青年層に与えた影響から、そして「明六社」のもつ歴史的役割か

ら考えてみてもやはりこれらの人々をあげねばなるまい。しかしたとえば、「明六雑誌」の掲載論文数という数量の点について第一号から最後の第四十三号までの総論文数をみてみると、総執筆者十六名による総計百十四篇のなかで、最も多く執筆しているのが津田真道の廿四篇、ついで多いのが阪谷の十六篇である。つづいては、

西　周　十三篇　西村茂樹　十一篇　杉亨二　十篇
神田孝平　九篇　森有礼　七篇　加藤弘之　六篇
中村正直　五篇

となり、三篇が福沢諭吉と箕作麟祥、二篇が柏原孝章、一篇が柴田（昌吉）と津田仙・箕作秋坪となっている。[22] このなかには最初の会員は全て入っているが、論文の多いのもそれらの人々に多く五篇以上の執筆者でそのご入会の会員は阪谷と神田孝平（通信員＝地方会員）のみであり、しかも阪谷の論文は第十号から第四十三号まで間隔もすくなく収められている。論文の数量ではなくその内容かどれたけ新知識を求めようとしている人々の要求に対応するものであったか、あるいは自由主義・功利主義的な反封建思想を内容としたという歴史的な「明六社」評価にどれだけ適合するものであったかの点が重要なことはいうまでもない。またすでに慶応義塾の講演会や「民間雑誌」の刊行、あるいは他の人とくらべて多くの出版を行っている福沢のような例もあるし、さらに「明六社」の活動に講演会のあることも論文数以外に考慮すべきであろう。「郵便報知新聞」も明治八年九月、「明六雑誌」廃刊について賛否両論がたたかわされ、阪谷らの続刊説に対して廃刊説に多数の賛成者があったことを報じてから半月後、精養軒での「明六社」集会を報じているが、そこでも「就中、福沢、津田の両君は相替らす高談雄辯、四筵を驚かしました。」[23] と報じて、「明六社」活動の質的中心はどこにあったかの一斑を推測させるのである。しかしながら幕末の儒学者阪谷か、いかなる理由からこの「明六社」の一員となり、明治新政府の下にあって周囲に当代最高の洋学者達とその学問をもち、いかなる観察と思考のもとに多くの所見を述べ、あるいは雑誌廃刊に反対したかは、けっして彼か「明六社」の、また歴史的な「明六社」評価作業の中心的人物ではなかっ

たにしても、日本人の思想の近代化とはなにかという問題にとって、そして日本啓蒙思想評価にとっても必要な一側面を提供するであろう。そのことは、「明六雑誌」に多くの論文を発表した阪谷が、同じ頃「洋々社」を西村茂樹等と創立[24]していることとも関連してこよう。「明六雑誌」と「洋々社談」でのそれぞれの発言は、母体団体の性格の差からも阪谷の思想の屈折を物語るであろうし、「明六雑誌」・「洋々社談」での発言と全集の内容との関連も注目すべきであろう。

「洋々社」は「明六社」の会員の多くとは対蹠的といってよい漢学者と国学者とを中心とした集会で、阪谷・西村の他に、大槻盤翁・黒川真頼・大槻文彦・那珂通世・木村正辞・小中村清矩、あるいは伊藤圭介等を会員とする保守的傾向の強い会で、のちには会員も増し相当大きな集会となっている。たしかに明治政府初頭の諸政策は開化的啓蒙的な進歩性をみせてはいたが、結局その基底には現実政治における復古派と公議派との政治的立場が不調和のまま織りこまれていたのであって、一時的な妥協はあってもやがて分解して、復古派の流れと公議派の流れとに分裂・対立し、そのもつれのうちに明治初頭の政治は展開し進歩的政策も打出されたのである。[25]そして明治七年の民選議院設立建白にはじまる自由民権運動、あるいは佐賀の乱・台湾事件による内外の多事に対する対抗策となると、ようやく専制的政策を明確にしてくるのであり、とくに明治八年六月の新聞紙条例・讒謗律の公布となると、学会やその構成員である知識人達にも強いショックを与えたことは、「明六雑誌」の廃刊事情からも察しうることであった。明治政府初頭の政策にみられる開明性も、この明治八年以降の対自由民権政策にもその限界を露呈し、政府の専制的色彩は十年代以後その濃化を強め廿年代にはその路線を確固としたものにしているのである。こうした状勢を背景に、政治とも関連した学界のなかでの皇・漢・洋学の軋轢は、明治六・七・八年の洋学全盛期に対して、八・九年頃の漢学派の抬頭をきたすのである。[26]阪谷が加わっていた「舊雨社」、あるいはより早いと思われる「劉門会」[27]といった儒学者の集団も、そうした状勢のなかで儒学（者）の地位について「謀回狂瀾於既倒」[28]ったともいえるのである。「洋々社」の結成は新聞紙条例等の公布よりやや早く、「明六雑誌」廃刊はいうまでもなく公布後であるが、「洋々社」の設立と活動も明治七・八・九年頃の政治・社会状勢と関連させて考えねばな

るまいし、「洋々社談」における阪谷の発言もそうした状勢のなかからその意味をうけとらねばならないであろう。先述のように「明六雑誌」での発言及び全集の内容との相互の関連は、そうした意味のうけとり方からはじめて明かとなるのだといえよう。

全集以外においても、阪谷と「明六社」・「洋々社」あるいは「舊雨社」等との関係を決して除くことが出来ないことは、以上に述べたところからも当然のことではあるが、次節以下、それらを含めた考察を進めよう。

尚、阪谷の思想内容を知る便宜としてその生涯を、初期・中期・晩期にわけて考察することとする。この区分は全集の区分によるものであるが、全集のとる区分の方法、つまり作品を、天保・弘化期の江戸遊学時代を中心とする初年集、嘉永以降の興譲館時代を中心とする中年集、明治以降の晩年集に分類して収める方法は、阪谷の思想内容の展開を知るうえにも便利であると考えてそれによった。内容的にいえば、初期と中期のものには共通点も多く煩雑な区分ともいえようが、晩期の思想の基調を形成した時期としても、江戸遊学時代と嘉永以降におけるはげしい時代の動きのなかでの備中における時代とはやはり一応区別して考えてみる必要をもったからであり、その内容は次節以下で述べる。参考までに各期における年代と年令を示すと、初期（文政5―弘化4、―25才）、中期（嘉永1―慶應3、26―45才）、晩期（明治1―明治14、46―59才）となる。

四

初期における阪谷の遺作は、上述のごとく全集の初年集として収められているものの他はその所在をまだ知らないが、中・晩期のものも同様に、全集の作品の正確な著作年月日は本文内で推測する以外に註記はない。初期における修学の師としては、大阪時代の奥野・大塩はまずおいて、昌谷精渓と古賀侗庵かもっとも関係が深かったといえよう。「献芹書」・「上某大夫書」・「代俗牘與速水子南」・「與森田謙藏書」「與人書」等、さらに「小松内府論」・「源頼朝論」・「源義経論」・「天野康景論」・「狄仁傑論」や「天論」、また「北遊放情稿」等の上述した紀行文は、昌谷・古賀の教授下にあって生れた初期の中心的な作品であろう。まず彼の基本的な考え方を知るためにそのなかから「天論」をとりあげ

てみよう。それによると「天其有意乎、漠漠然無意也、天其有知乎、茫茫然無知也、然則祥殃之至、如有賞罰、敬其徳、畏其威、受其命者、何也、曰、天理與気而已、理之霊、気之運、神妙不測、無意而意、無知而知、無賞罰而賞罰、皆自然而然、……但理有常、而気有変、為善而必祥、為悪而必殃、理有之也、有時而不必祥、不必殃者気為之也、変則不久而帰常」という。つまり理と気の働きこそが、自然界の根本理念であるばかりでなく、人間社会の道徳・政治の根本理念でもある。しかも、「不依理気、以欲致福禄、是猶農而不務農、以求稼穡之豊、商而不務商、以求贏利之多、其不可致也必矣、故余以為施財於浮屠、不若施財於人之為功徳、致信於神佛、不若致信於理気之有感應、然而不暁者、何哉、私欲迷之也」というのであり、「世又有以天為不関人事者、是亦不辨理気之過也」にすぎないのである。したがって、「是以聖人之教、修其在己者、而待其在彼者、故曰、天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教、……依其教、修其道、率其性、孜孜焉、盡我力以安命焉」ということが、人間としての根本命題であると説くのである。こうした理論にたった阪谷からみれば、たとえば日本史上の平重盛は、情理にとらわれることの多い仁人君子の例にもれず、その行動に対しては、「則於竭力待命之義、未為無憾也」の評価を下すのである。また源頼朝の猜忌心にこの武将評価の基準をもとめているが、頼朝と義経の関係については、つぎのように考えている。頼朝の猜忌心は初めから義経を嫌っていたが、ただ義仲・平氏討伐のためには必要としたのであり、平氏滅亡後は奥羽藤原氏討伐のために必要としたのであり、腰越でも殺さなかった。なぜ藤原氏討伐のため必要としたかというと、義経の存在を利用することで藤原氏内部に分裂をおこすことが出来ると考えたためで、義経追捕も本心は彼が奥羽に入らないことを恐れたがためである。これに対して義経のとるべき道は、壇浦戦勝後、王家中興の大義により文武合一の旧典を回復したのちに、鎌倉へ復古の事体を知らせればよかったのだが、微功にあまんじ時勢を省みなかったためにかえって頼朝に口実を与えてしまった。しかし「日兄謀弟、弟不可以謀兄、義経奔走奉命、唯父讐之報、可謂得其道矣、設使知其謀己、唯有一死而已、当此時、私怨不可滅大義也」あるいは「天下莫重於父、而有時乎為君屈、大義滅親也、故君子於人倫之変、一断以大義、余於義経兄弟、請亦以大義断之」という観点から評

価を下すべきであり、「曰、義経固請討兄宣旨、果当其義乎、曰、名則正矣、情則非矣、非能明大義而然、出於不得已而已、名実不合、而失其機、何義之有」とも解釈するのである。

これらの作品からみた阪谷は、まったく朱子学派の根本理念による理論と修学の枠から出ないものであるといえよう。たた残存するもののなかに史論の多いことは、旅行による実地見聞とともに、詩・文を中心とする文学面以外に、初期にもみられる経世家的発言を中期以降多くさせていく素地を作るものであったろう。しかしその史論にしても朱子学的名分論による解釈から一歩も出るものではないし、頼朝の猜忌心、あるいは重盛・義経・天野康景論のように、過去の武将・君子の行状評価はそのまま自他の修心・行状の道徳規範たるべきであるとの意識も強いのであって、「天論」あるいは史論は、朱子学理論のお手本を下敷きとしたものともいえるのである。こうした初期の学問の性格と、終生「白鹿洞書院掲示」を服膺したことを考え合せてみると、中・晩期に至っても学問・思想の基調が朱子学理論の枠から出ないものではないのだろうかという一つの予測をわれわれにもたせるのである。しかしながら、たとえばその師昌谷・古賀のいずれにしても、その対外観が夷狄観に終始したという内容の問題もあるが、寛政期以降のあいつぐ外国関係の事件発生を契機として否応なしに外国文化・事情に接触せざるをえなくされ、そこから必然的に国内政治への関心増大という契機を生むという循環を背負わされているのであって、寛政期以降の儒学者のかかる姿勢は阪谷にもあてはまってくるのであり、対外観だけではなく国内政治への儒学者的見地からする強い批判をともなう経世家的発言が彼によって述べられるのである。そうした社会的あるいは政治的契機によって、朱子学理論のなかから経世家的発言がなされるのであり、阪谷の思想のユニークな一面を形成するのである。ではつぎにその発言内容を「献芹書」以下から検討してみよう。（未完）

註

① 宮川透『近代日本思想の構造』第一章日本啓蒙思想の構造。　② 『明治維新史研究講座』第四巻第五章第三節、宮川透氏の執筆。

③ 永井秀夫「近代史研究への反省」（「歴史評論」一九六一年五月号所収）参照。最近までいくつかの論稿が発表されているが、啓蒙思

想史関係のものとしては、まず初めに再検討を述べられた、上山春平「明治維新論の再検討――思想史研究の見地から――」（「思想」一九五六年十二月号）と、もっとも最近の、森田康夫「明六社論」（「歴史学研究」一九六一年六月号）をあげておく。

④ 永井前掲論文。

⑤ 天保期から慶応期までと理解して使用する。

⑥ これらの点については改めて論及したいと思うが、幕末期知識人の明治政府下における思想と行動については、たとえば福沢諭吉の「福翁自傳」・「瘠我慢の説」、「栗本鋤雲」（「世界」昭卅二年十月号の座談会）、「幕末から明治へ――近代文学の前提を求めて――」（「文学」一九五七年十一月号の座談会）、あるいは刊行中の『近代日本思想史講座』第四・第七巻の諸論文等は多くの示唆を与えるものといえよう。

⑦ 本文で後述する「朗廬全集」に収める。従来の辞典の多くは、阪谷についてこの碑文に従っており、彼の伝記資料の中心であった。

⑧ 現在の岡山県小田郡美星町九名（以前は川上郡日里村であった）。「備中村鑑」上（「吉備群書集成」第2所収）によると、都宇郡撫川（なかわ）を居所とする交代寄合戸川家の所領だった。

⑨ 奥野小山（寛政12―安政5）大阪の船越町島町に住む篠崎小竹門の儒者で詩をよくした。大塩中斉（寛政5―天保8）については述べるまでもなかろう。（奥野については、森繁夫稿「大阪人名辞彙」による。）

⑩ いずれも碑文の句だが、本節（二）においての引用は別に断るもののほかは碑文からで、（　）内の註記とふり仮名は大月がつけた。

⑪ 昌谷精溪（寛政4―安政5）名は碩といいやはり九名村出身で、初め阪谷であったがのち昌谷と改めた。亀井南冥・佐藤一斉門にもおり文政年間昌平黌に入っているが、戸川氏のもとからのちには津山藩に仕えている。（「送師録」（全集））徂徠学にも通じたというが、朱子学を中心とするものであろう。第四節に述べるように、時代の要請は昌谷の眼を海外に向けさせたがその内容は、儒学的夷狄観であった。（斉藤竹堂著「蕃史」に附した嘉永四年の序文参照。「鎖国時代日本人の海外知識」西洋史の部の六に所収）阪谷もよく親しんだことは初期のものでも「賀精溪先生立嗣嫁女序」（全集）等をみてもわかる。

⑫ 古賀侗庵（天明8―弘化4）肥前佐賀に生れ、文化六年父精里とともに幕府儒員に列し父と同番仰せつけられ、のち御儒者となっているが職掌上外交方面に関心をもち、ロシア関係文献集として「俄羅斯紀聞」があり、その他外国関係のものとして「俄羅斯情形臆度」「海防臆測」があるが、やはり夷狄観に立脚するものである。いうまでもなく朱子学派正統の位置にある人である。（古賀増「先考侗庵府君行述」（「事実文編」第三、64）及び「鎖国時代日本人の海外知識」西洋史の部の三参照）。阪谷は侗庵歿後はその子謹堂門に入ったという。（「朗廬文鈔」序）しかしそのことは中期以降においてふれることとなろう。

⑬ 帰郷について、たとえば「北遊放情稿」では、天保十三年九名山中静勝館（阪谷家）でまず初稿を書いていることがわかるが、碑文も

もちろん一々帰郷を記すわけにはいかない。ただ碑文によるこの節の記述にそうした瑣末な点での正確さは万全をきしえないことをお断りしておきたい。

⑭ 現在の岡山県井原市西江原町。

⑮ 興譲館設立前後の事情については、「日本教育史資料、参」の巻九郷学の該当項によった。

⑯ 警視庁勤務は「朗廬文鈔」序による。「江木鰐水日記」九（「大日本古記録」所収版の下）明治五年四月十八日の項では「兵部省編輯官、為九等出仕」とある。勤務先の順次も今は碑文その他にそのままよっておく。たたし警視庁は一應先頭にたてておいた。

⑰ 碑文とともに「朗廬文鈔」序はこのことをのせているが、碑文と異り、序はこのあと「明六社」参加について、「君参其社。益博見聞。」と簡単に述べている。

⑱ 「日本教育史資料、参」によると、多くの遺稿をとりまとめ明治政府に報告・提出したことがあるという。

⑲ 全集以前に刊行された「朗廬文鈔」というものがあり、それに附した川田剛の序文の一節である。この序文は全集に復録された。

⑳ このことは、全集のもつ内容的制約によるものともいえよう。この全集は、素の子芳郎が企て阪谷丈が協力したもので、「至断簡零墨。若一時卒作而不経意。悉収録之。非曰敢問于世」るものという。（詩は文集（文鈔のことか）に既出のものは重載しない）しかし編者丈による「集中文字。有混邦俗所習用諺辞。似欲雅馴者。若自主自由之類。是也。是先生自有説而用之。讀者諒其非偶然之誤。」（いずれも全集例言から）の語が示すように本来、詩文による儒学者阪谷の面目を表すことが真眼目であったことは明かのようで、指摘するような制約は当然かもしれない。

㉑ 「明六社」と「明六雑誌」については、麻生義輝「近世日本哲学史」第四編第一章の一、及び「明治文化全集」雑誌篇中の「明六雑誌」解題と、「明治初期雑誌について」（いずれも西田長壽氏執筆）参照。明治七年二月会則制定時の最初の会員は十名で、八年二月一日には卅人になっている。

㉒ 「明治文化全集」雑誌篇所収の「明六雑誌」索引によって、論文の長短にかかわらず計算してみた。

㉓ 「新聞集成明治編年史」第二巻所収。

㉔ 以下「洋々社」・「旧雨社」に関しては、麻生義輝前掲書の第四編第一章の二を参照。

㉕ 大久保利謙「明治憲法の制定過程と国体論——岩倉具視の「大政紀要」による側面観——」（「歴史地理」第八五巻第一号）参照。

㉖ ㉔に同じ。尚、詳しくは、尾形裕康「明治初期皇漢洋三学派の抗争」（「社会科学討究」第一巻第一号）参照。

㉗㉘ 「朗廬文鈔」序による。「劉門会」は、阪谷が伺庵歿後師事した古賀謹堂を旧弟子達が囲む会である。